



Enjoy 里づくり！ 里地里山フィールドワーク の手引き



目次

- はじめに： p.2
- 1、里地里山とは？： p.3
- 2、事前の準備： p.6
- 3、地域に入るにあたって： p.8
- 4、フィールドワークのテクニック： p.12
- 5、調査の整理方法： p.18
- 6、成果物の還元と地域づくりへの貢献： p.20
- おわりに： p.21

はじめに



里地里山での学びはとても楽しく感動的なものであると言えます。里地里山での教育や調査、そこでの体験活動の特徴をいくつか次に挙げてみましょう。

- 1、学びの場である「教室」が一つの地域圏全体であること。したがって、キャンパスの運営は学校関係者だけでなく地域社会の構成員と共に協働して行われることになります。
- 2、通常、学校で行われる営みは教育が主なものです。しかし里地里山の地域社会での学習主体は生徒や先生だけではなくその地域の住民も同じく研究・教育の主体です。つまり単なる「学習対象」ではないということであり、共に育み学んでいくという「共育」の考え方が大変重要です。
- 3、里地里山での研究・教育活動や体験活動の成果は、単なる学術研究や学生に対する恩恵にとどまりません。地域社会に還元・貢献することが特に求められます。

以上のことを考えてみると、里地里山地域で学びフィールドワークを行いながら地域づくりを展開していくためには、留意しておかなければならない点がいくつか出てくると言えるでしょう。特に教育や体験活動における地域社会とのつきあい方に対して、ある面での慎重さとまた同時に学術研究の領域を超えた大胆さが要求されてくると言えると考えられます。

本稿では、里地里山での教育や体験活動、交流活動を行っていこうという指導者や、これから里地里山で学んでいこうという若手の学習者のために、地域社会での基本的な姿勢(地域に参加するものとしての立場性の問題)やフィールドワークをするにあたっての基礎的な技術や知識について概説したいと思います。

しかしこの稿で触れることができるのは、私たちが普段活動している山形県最上地方と庄内地方の地域社会から見えてきた本当に基本的なところだけです。実際は様々な地域社会の混沌としたあらゆる状況の中で、住民とともに時に楽しみ、時に泣きながら会得していくしかないものであるとも言えます。つまるところ指導者や学習者の各々の人間性の問題が深くかかわることであり、里地里山での活動が常に人間臭く、泥臭く、そして時に大きな感動を持ったものとなるのは、こんなところに理由があると言えるでしょう。

本冊子はささやかなものですが、里地里山での学習が真に学生にとっても教職員にとっても、そして地域社会の方々にとっても良い学びの場となり、今後の里地里山作りの発展へとつながるための一助になればと願っています。

1、里地里山とは？

■ 里地里山とは？

農山村のことを「中山間地域」と呼ぶことがあります。とりわけ農林行政でよく使われる言葉です。だがこの言葉のニュアンスには過疎化少子化が進み今後維持が難しい問題含みの地域といったマイナス面を想起させるものがあるようです。この稿では、そうしたマイナスイメージから出発しないで、ふるさとの原風景を残す自然や文化が豊かな地域というとらえ方で「里地里山」という言い方をしたいと思います。里地里山の活動自体が、こうした里地里山の地域社会への可能性を信じ、それを開いていこうという取り組みでもあるからです。

ところで農山漁村の活動フィールドのほとんどすべてが「里地里山」地域であるか、もしくは里地里山に密接な関連を持って暮らしが営まれています。里地里山にはどんな特徴があるのでしょうか？農山漁村は、自然が豊か、文化が豊かと紹介されます。その豊かさがどういう風に成り立っているのかということを改めて考えてみることで、それが見えてくるでしょう。



山形県最上地方の里地里山全景（写真は戸沢村角川地区）

里地里山は里の人々の生存景観だ。人が自然に働きかけてそこに「暮らし」をつくりだした。写真の景観はほとんどすべて人の手が入ることで維持されている。

里地里山

～「人」と「暮らし」とのつながりとかかわり～

自然環境

「里地里山」の特徴の第一は自然環境的には原生自然じゃないということです。居住している里の住民が地域の里山や集落周辺の環境に日々働きかけて改造しています。このように人が手を入れている事によって逆に豊かな自然環境が成り立っています。具体的に言うと里山の適正な間伐をしたり、あるいは作業道を作る事によって里山に入っていけるような環境を作ったりして人が継続的に入る。さらにそのすぐ下流部に棚田が作られていて、きめ細かな水路で山の出水をうまく引き込んだり、ため池がいくつもあってそれも水路でつながれたりして成り立っています。それによっておいしい棚田のお米が作られるというわけで、手を入れれば入れるほど豊かな生産性を持つわけです。

これは生態系的な側面すなわち生き物の視点から見ると、人の手を介して多様な水辺環境が整備されているからこそ、対応していろんな生き物が生息できると言えます。例えば私たちが普段活動を展開している山形県最上地方のある集落では、棚田のある一つの地域圏だけで20カ所くらいのため池が作られていたりします、そしてそこにはヌマエビが生息していたり、山の出水の所にはサンショウウオが3種類もいたりします。そんな風に生き物が増えるという働きを持っているのです。

もし原生自然のままであれば強い種だけが残っていくので特定の種類の木だけが生育するような里山になってしまうでしょう。そうするとその植生に依拠した生き物しか生息できないわけです。そうではなくて里の方々が里地里山へ入って継続的に仕事することで、結果としてかく乱作用がおこり非常に豊かな自然環境が形成されるのです。

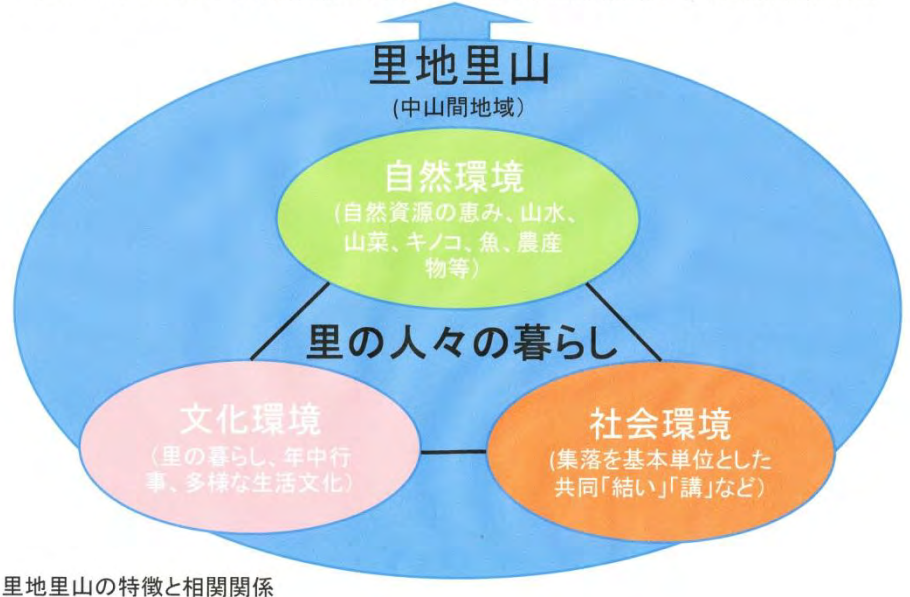
文化環境

このように人の手が作り出した多様な自然環境によって多くの恵みが生まれます。それが地域の暮らしと関連して多様な里の生活文化が営まれることになります。逆の言い方をすればそうした里の暮らしの生活文化が里の自然環境を作り上げているとも言えるのです。このように里地里山の自然と生活文化は相関関係にあると言えます。とりわけ里地里山の食文化はとても豊かですね。最上地方では、春だけで100種類以上のレシピがあるし、地元のキノコを使った料理もやっぱり100種類くらいあるようです。冬も独自の郷土料理があります。冬は山菜やキノコなどの里山の産物の第2シーズンとも言われます。一年の間にとれたものを上手に保存して冬の郷土料理が作られる、その保存料理の技術や工夫はまさに脈々と受け継がれた生活文化の豊かさを感じさせるものです。



多面的・公益的機能の発揮

(地域の暮らし、水涵養、農産物の供給、ふるさとの原風景(癒し)、地球温暖化防止.etc)



里地里山の特徴と相関関係

→
右図のように里地里山の自然・文化・社会は人々の暮らしを中心にして織り成しあいながら形成されている。

そうした山の幸に加えて里で作られた農産物が加わって、非常に多彩な食文化を構成しています。そういった里山からのめぐみとか農業からの恵みというものを地元の方がよく知り尽くし、さまざまな知恵や技術、工夫で暮らしに役立てているというわけです。

□ 社会環境

こうした取り組みはもちろん1人ではできません。だから里地里山の人々は、「結い」とか「講」とか集落を基本単位にして共同で協力し合い、話し合っってこうした里地里山の自然や文化を力を合わせて維持し整備してきました。そうした仕事を協働で行うために地域には密接な人と人のつながり、里の社会的システムや近所づきあいの風景が存在しているのです。

□ 現状

こうした里地里山の営みには地域の住民、すなわち「人」と「暮らし」がとても大切な要素であるというのが最大の特徴だと言えます。でも現状は過疎少子化で、非常に危機的状況にあります。このままではいくつもの集落が近い将来消滅してしまうだろうという予測もあります。しかし一方で逆にそういった里地里山の自然や文化、コミュニティ活動の価値が、今まさに新しい形で見直されつつもあるわけです。里地里山のフィールドワークや地域づくり活動はこうした現代的状況にある里地里山からいかに学び、そして住民とともに新たな里づくりにいかにかかわれるかということが大切になります。では私たちはこうした里の人々と共にどんなところからはじめればよいのでしょうか？

2、事前の準備～情報収集と装備の決定～

誰でもそうですが、たとえ関心を持った地域であっても、自分の日常生活から離れた地域に入るのは、期待もあれば不安も大きいものです。だから用意のいい人はあらゆる手段を通じて事前に情報収集にかかるでしょう。

考えられる主な情報源は次の通り。

- (1) ホームページ（自治体、NPOなどの活動団体、観光協会、企業、その他もろもろ）
- (2) パンフレット（自治体の紹介パンフレット、地域づくりパンフレット、観光パンフレットなど）
- (3) 文献（新聞・雑誌等の記事、市町村誌、研究文献等）
- (4) 口コミ（すでにその地でフィールドワークを行った人からの話など）

でも、こうした情報を活用する際に、特に次の2点はだけは特に注意しなければなりません。

- (1) その情報が、「誰が誰に対して」「何を何のために」「どのように」発信しているのかということに着目し、そのまま鵜呑みにしないこと。
- (2) 事前に得た情報だけで固定化した地域イメージを作って自分の中に内面化しないこと。

情報には必ずその発信者である主体の偏った見方（バイアス）がかかっています。同じ一つの地域でも人によって語られ方が多様だし、また逆説的ですが、紋切り型のありふれた型にはまった表現もしばしばです。そのような事前情報に自分あまりにも絡め取られてしまうと、せっかく現地に行ってもその情報イメージでしか地域社会を見ることができなくなってしまう。せっかくその地域に行くわけだから自分独自の視点から様々な地域のおもしろさや驚きを見出してきてもらいたい。そのことが、地域の人にも気がつかないような新たな再発見へとつながり、地域づくりの新たなアイディアの苗床になる可能性を開くからです。

■ 現地の人々との最初の接触

現地の受け入れ者からの情報とアドバイスはとても重要だ。特に里づくりに関わる活動の際は、基本的に現地の活動者がいるためこの点はあまり心配のないことが多いが、初期段階からよく話を聞いてどのように自分たちが地域に入ればよいかを把握しておくことが重要でしょう。フィールドワークの基本はなんといっても地元の人たちのことをよく聞くこと。不安なところは受け入れ先や活動事務局となっている現地の人々に電話で直接事前に聞いてみるということが重要でしょう。里地里山で活動する現場の人たちはかなり親切に答えてくれるし、また地元の人たちにとっても質問を通じて、逆にこちらがどんな人なのかを確認できることで安心することにもなる。事前に電話を通じての交流やコミュニケーションを作っておくことは大変重要です。

このような作業を通じて、地元の人たちのアドバイス等に従って装備を決定していくことになります。

■ 装備の決定

最低限必要なものは次のとおり。

・フィールドノート：

メモをとるためのもの。コンパクトでかつ書ける分量がある程度多くあり、また丈夫なものがよい。筆記用具もできるだけコンパクトなものが便利です。

・デジタルカメラ：

現地では多めに写真を撮ることをお勧めします。いざ調査から帰ってみると使える写真が少ないことに気がつくことが多いからです。最初から気がついたことは多めにこまめに記録しておいたほうがよいでしょう。もちろん撮影許可が必要なところはきちんと確認することを心がけましょう。

・地図：

必須アイテム。まとめと整理をする際にも使えます。

■ その他は野外を中心とする調査なのか、屋内を中心とする調査なのかによって装備が異なります。里地里山の野外調査で必要な一般的な装備を紹介しておこう。

- 帽子：頭部を守る為、必ず必要。里山整備作業などの際には、ヘルメット着用が必須。現地で用意しているかどうか確認が必要。
- 着替え：里地里山の活動では結構汚れたりぬれたりする場面が多い。
- タオル・手ぬぐい：汗を拭くだけでなく怪我をしたときにも活用できる。
- 応急処置セット：いざという時のため消毒液、絆創膏、包帯など最低限のもので可。
- 水筒：水分の補給は現場の活動では命にかかわるもの。必ずもちたいアイテム。
- 双眼鏡：もしできれば。山や川などで遠くのことを指し示しての説明もあるため、あれば便利。

■ 以上まとめると次のようになります。

- ・参考資料：市町村のホームページ、パンフレット、チラシ、地図など。
場合によっては、生き物図鑑等のハンドブックを持参すると便利。
- ・記録するための道具：フィールドノート、デジタルカメラ、ビデオなど。
- ・観察するための道具：双眼鏡、虫眼鏡など。

3、地域に入るにあたって

～フィールドワークの方針と里の人々との付き合いの流儀～

□ 最初が肝心～受け入れてもらえなければ始まらない～

里地里山でのフィールドワークや地域活動はとにかく人とのふれあいが重要です。里地里山の自然も文化も社会構成もすべてそこに住んでいる人々が深く関係し、たいていの場合、住民相互のつながりもとても濃いものがあるからです。

だから最初が肝心。まずはフィールドワークでお世話になる方々やその地域社会の人々に受け入れてもらえなければ何も始まらない。どのように里地里山の人々と関係をつくりあげていくかということには、特に何かマニュアルがあるわけでもない。それはフィールドワーカーであるみなさんの日常生活における人付き合いのあり方が影響してくるものとも言えます。すぐに改めて気をつけようとしてもなかなかうまく行かないことが多いものです。だから里地里山での活動はこれまでの人間関係のあり方を見直すきっかけにもなることも多いのです。

とはいえ、里地里山の人々は異なる環境、背景の元で生活をしているわけだし、また世代層もとても異なっている（たいていの場合かなり年上）ということもある。また、私たちが目指すフィールドワークや体験活動は、地域づくりへとつなげていきたいという地域住民の思いと触れあうことが大切であることから、いくつか心に留めておいてほしいこともあります。

(1) 徹底して聞くこと、見ること、させてもらうこと。

自分の興味関心も大切だが、まずは地元の方々がどんなことを伝えようとしているのか、どんなことを伝えたいのかに耳を傾けてみるところからはじめてみるのが大切です。

特にお世話になる方々は、里地里山で何らかの活動に取り組んでいる人たちなので、地域に対してとても熱い思いを持っています。そうした地域の方々が発信しようとしているメッセージを出発点に自分たちの興味関心へとつなげていくという姿勢がよいと思います。まずはとにかく徹底して地域の方々の話に耳を傾けること、見させてもらうこと、そして可能ならば、させてもらう（体験する）ことが重要でしょう。



聞くこと、みること

森の植物についてどのように暮らしにいかしているのかを教えてください。



させてもらうこと

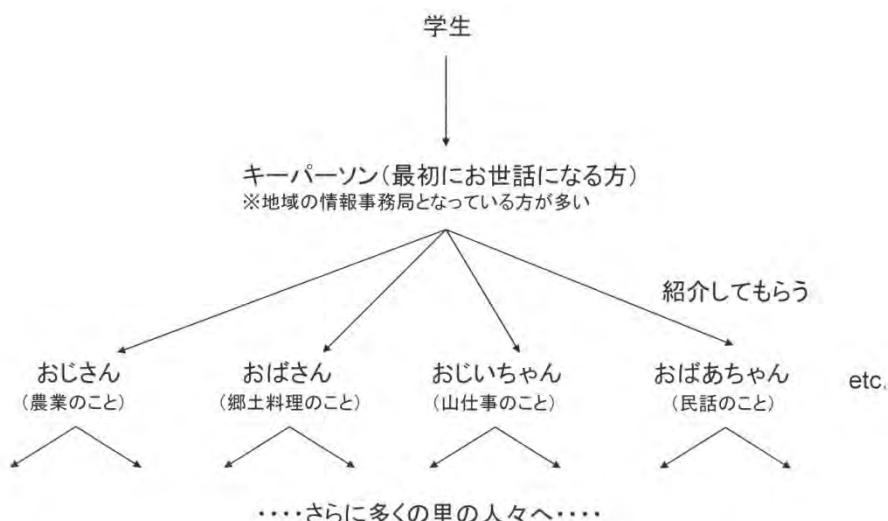
体験は楽しいし、本当に理解するための第一歩。写真は里山の間伐材を山から出しているところ。

(2) キーパーソンを出発点に地域の人々との付き合いの幅を広げていこう。

里地里山の活動でお世話になる方々は言ってみればその地域の活動のキーパーソンであると言えます。まずはこの人を出発点にして様々お話を聞きながら、次第に他の地域の人々へと付き合いの幅を広げていきましょう。キーパーソンから徐々に人を紹介してもらえばよいでしょう。このように地域社会の人々の付き合いのネットワークへ自分も徐々に身を投じることによって、徐々にムラの構成も把握できるようになっていくでしょう。

こうしたフィールドワークのネットワーク作りを例として模式図で示すと次のようになります。

付き合いのネットワークの構築



付き合いの幅が広がるにつれてより多くの情報、その地域の知恵や技術に触れることができる。

(3) 研究調査が進むにあたって勘案に入れること

フィールドワークによる調査研究が進むにつれ、学生は徐々に地域の様々な人たちと接触し、地域の内部状況も把握していくようになっていくでしょう。学生は単なる観光客の領域を越えて地域社会と接触していくことになります。そうすると次の3つの要素が徐々に住民の口にのぼってきます。

- ・地域の政治的・社会的・経済的状況と課題
- ・フィールドワーカーに対する地域感情
- ・フィールドワーカーの立場性の問題

私たちが里地里山で行うフィールドワークは、地域づくりにどのようにかかわれるかということを探求しているし、地域住民もそれを期待している。だから当然その地域の政治的・社会的・経済的状況やその課題といったものが地元住民の口にのぼってくる。また、フィールドワーカーに対する地域感情も出てくるだろう。平たく言えば、外部者が地域に入ることによって、受け入れをしている地域にとってはどんなメリットがあるのかということにかかわる地域感情です。冒頭述べたように里地里山地域は今大変厳しい状況にあります。だから、たいていの場合その地域の方々はどのようにそこで暮らしていくのか、どのような将来像を描いていくのかということに対してとても一生懸命です。それは里の人々にとって死活問題であるからです。

だから、こうした政治・社会・経済的課題との関係において、活動をしたり学んだりする私たちに対する地域社会の方々の感情がどんなものなのか、そのことにきちんと目を向けて行動していくことが里地里山でのフィールドワークでは求められます。つまりフィールドワーカーである私たちの学習者としての、活動家としての立場性の問題が浮上してくると言えます。

(4) 地元の方々と協同する学習のすすめ -「共育」という考え方-

そうは言っても、私たちが地域社会に対してすぐに課題の解決や地域づくりのアイディアを出せるわけではありません。地域貢献なんてものは、とても一朝一夕にできるものではないものです。しかし少なくとも地域の人々の言葉に耳を傾け、聞き役になることはできます。

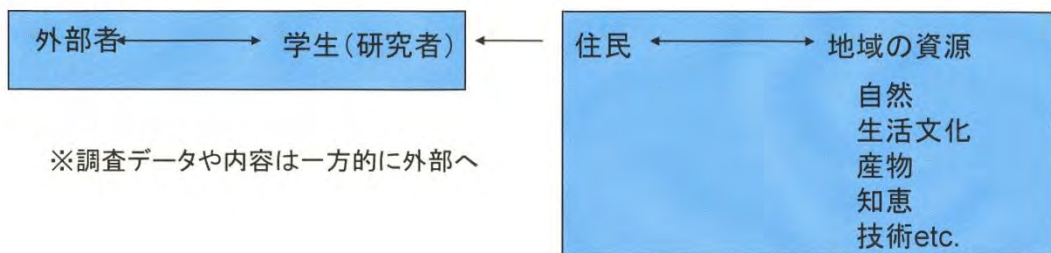
それをもう少し進めてみると、地域の方々と違って、地域の日常の生活世界は、外部者（もしくは異世代）である私たちのそれとは違うので、私たちは異なる観点から質問ができます。これをもっと進めていくと地元の人と違った目線の違いを利用して質問や話題を投げかけることになり、そのことが地域の価値や可能性を再発見するためのきっかけを作ることになるかもしれないのです。

このように一方的に地域から学んだり活動場所の提供を受けるだけではなく、地域の人達もその学びの活動を通して地域を再発見し、自らのことを自らで学んでいけるような双方向の学びが促進されるフィールドワークとなることが大切です。こうした共に育む学びの場を作り出すことが里地里山のフィールドワークにおいてはもっとも望ましいことだと考える。

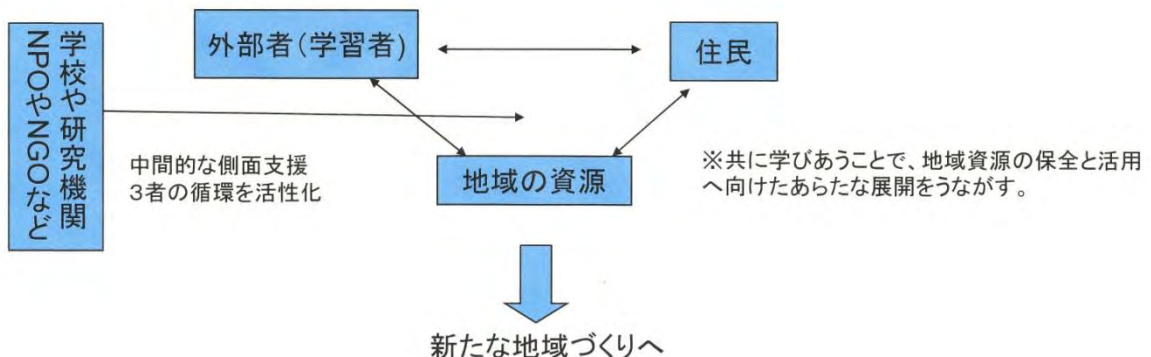
このような「共育」（共に育み育まれるという学び）を地元の人々とフィールドワーカーである私たちとの間で一緒になって構築していくことが重要です。では、具体的にはどのようにしていけばそれが可能でしょうか？次章でその手法に触れてみましょう。

学生(研究者)と住民の関係性の新たな構築

一般的な調査研究



里地里山の協同の調査研究



4、フィールドワークのテクニック ～「地元学」のすすめ～

■ 里地里山活動におけるフィールドワークの特徴

一般的に言って学術的なフィールドワークでは、次のことが前提となっていると考えられる。

- A 調査者（学生）と被調査者（住民）は厳密に分離。
調査者が被調査者を研究対象とする。
- B 調査者は特定の学問分野に所属し、研究の第一義にはその学問の発展に寄与することが求められる。
- C 発表の場は基本的には大学等の研究機関や学会である。
したがって、必ずしも地域住民に理解可能な言語でまとめる必要はない。
- D 研究成果の社会的貢献（地域貢献）はA~Cの条件を見たしなおかつ余力がある時に行う（えばよい）。

里地里山活動にかかわるフィールドワークではこの前提が**180度異**なってくる。

- A 学生（外部者）と住民は共に調査・研究者でもあり学習者でもある。
- B 調査者（特に外部者・学生）は特定の学問分野に所属したり、専門家である必要は必ずしもない。むしろ無知なまっさらな姿勢で地元住民の話を引き出せる謙虚さや着眼点が必要である。
- C 発表の場は地域社会である。したがって、地域住民に理解可能な言語でかつ一般の人たちにも興味関心をそそるようなものでなければならない。
- D 研究成果（研究調査の行動自体も含めて）はその調査地域の社会的貢献が第一義的に求められる。

このように学習者が外部者として地元住民と協同的实践のフィールドワークをすすめていくためにはどのようにしたらよいのでしょうか？これは従来の研究手法では十分解決できない問題をはらむことです。そこでここでは「地元学」の考え方を里地里山のフィールドワークの手法として提案してみましょう。

地元学のすすめ

「地元学」は、地元学ぶということです。自分たちが暮らす地域のことを外部者（ヨソモン）の目を借りて、一緒に歩き、調べる。そのことによって地元住民だけでは当たり前すぎて気づかなかったことに気づいたり、新しい発見が生まれたりする可能性が出てきます。そのようにして地域で見つけたことを地域で話し合い、これからの地域づくりを住民と一緒に住民の思いを土台にして考える、そのきっかけが地元学です。どこかの誰かやヨソの誰かのためにやる学問ではない。その地域で、学生でも住民でも、調べた人、参加した人だけが地元のことにさらに詳しくなれます。

里地里山は、そこに住む地域の人々が長年暮らしていくために作った自然であり文化の総体であると言えます。だからそこに学びながらさらに里づくりにもかかわるという時に、このような基本的な考え方が大切でしょう。つまり地域住民の日常の生活世界、そこにはその土地とそこに住む人の知恵や技術が埋め込まれているわけですが、そこから学び、共に体験・経験を楽しみあおうとする姿勢です。そんなこんな考え方をすすめる調査の手法なので、当然決まった型はありません。でも一つの例として次のようなやり方が参考になるでしょう。

地元学実施のために

1、基本的なすること

地域の人とよそモンと一緒に集落を歩いて、「あるもの探し」をする。

2、地元学調査（調査方法はいたって簡単）

ステップ1:じいちゃん、ばあちゃん、その他集落の人、よそものが集まる。

ステップ2:集落や集落の周辺地域をいっしょにまわり、よそものが面白そうだと思うことやものを集落の人に質問し、それを写真に撮り、集落の方の説明を資源カードに記入していく。

ステップ3:調査からかえってきたら、その結果をカードをもとに発表。（→地域内コミュニケーションの活性化と情報の共有化）

ステップ4:調査からかえってきたら、その資源カードをもとに地図に書き込んでいく。また資源カードを整理し、一覧表を作ります。



↓
地域環境マップと生活文化大百科の
出来上がり



地元学における着眼点の例

□ I. 歩くところ

- 水のゆくえ
- 集落の生活文化

□ II あるものの探しの視点

- 水の行方：家の水はどこから来ていますか？どこへ流れていきますか？
- 有用植物：イエの周りで、食べられる植物、薬になる植物はどこにありますか？
- いい伝え：自然神はどこにありますか。その神様は何の神様で、どういう意味ですか？
- 鎮守の森：水源や自然神の周囲にはどのような樹木が生えていますか？
- 生き物：家の周りの川や野山にはどのような生き物がいますか？
- 昔遊び：おじいさん、おばあさんは、昔どのような遊びをしていましたか？
- 地域の知恵袋：集落にはどのような人が住んでいますか？
- 地域資源：集落の人が大切にしている場所、もの、宝物は何ですか？
- 食べ物：家の周りではどのような野菜や食べ物を作っていますか？
- もののゆくえ：食べ物、道具、木材、ゴミなどは、どこから来て、どこへ行きますか？

□ III 何をするのか？

- 話を聞く：一緒に歩いていて見つけたもの、写真にとってものの等、地元での名前や呼び方、使い方、食べ方、物語を地元の人に聞き、資源カードに記入する。
- 写真を撮る：歩いていて見つけたもの、気がついたこと、驚いたこと等を写真に撮る。写真を撮った場所を、地図に書き入れる。

(以上、里地ネットワーク「地元学へようこそ」参考)

調査手法の実際

地元学の調査で使われるのは次の5つの手法に大別できます。実際の場面ではこれらが組み合わされて使われます

- (1)聞き書き：基本中の基本。地域の人に出会って、話を引き出せなければ何も始まらない。まずは地元の方々の言葉に耳を傾けよう。そしてそれを地元の言葉で記録していく。



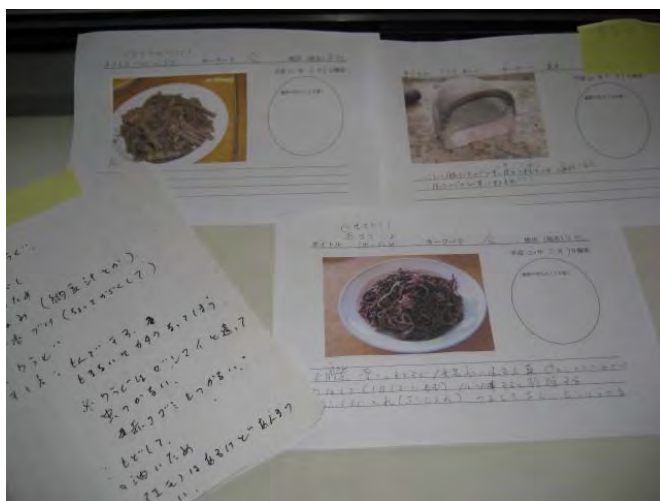
聞き書きの様子

里地里山では、具体的なものを前にして話を聞くことがわかりやすく説明してもらうためのポイントです。

- (2)フィールドノート・カード：聞き書きしたメモや写真をフィールドノートにまとめる（感じたことや地元の人じゃない人でも分かるような解説を加える等）。カードを活用すると、要素ごとにまとめることができるほか、それを広げて住民と視覚的に情報を共有することができるという利点があります。

資源カードとフィールドノートの例

地域の人々の声を生かして書く。
難しく書く必要はない。



(3)地図：

位置関係や空間の把握に役立つ。また、地域環境を把握するのに役立つ。直接的な効果としては、視覚的に全体像を示すことができるため、地元の方々が大変興味を持つことが多い。地図を色分けしたり情報を書き込んでいく作業はぜひ住民といっしょにやってみましょう。地図の作業をしながらより多くの話を聞くことができるでしょう。



地図の作成作業

地域の状況が地図上で浮き彫りになっていく。地元住民と行うことで関心が高まり、よりさまざまなことを聞き出すきっかけともなる。

(4)写真・ビデオ

里地里山の自然や文化、知恵や技術は、なかなか聞いただけでは分らない。

見て、さらにはやってみてはじめて分かるということが多いものです。文章表現の限界を超えて表現不可能な私たちの日常生活とあまりにも異なる「もの」や「こと」も数多くあります。この時に役に立つのが写真やビデオです。

これは記録として役立つだけでなく、聞き書きを行う際に、撮影した写真やビデオを見せて、地元の人により具体的に質問ができるというメリットもあります。

写真の整理作業

この作業が結構楽しい。
地域の人たちと一緒にやろう。



(5)ワークショップ

カード作り、地図作り、写真やビデオの整理などは私たち学習者だけではなく地元の住民もいっしょに行うことができるものです。そのように調査の作業を共にすすめていく事で、より興味深い分野を発見したり、調べてきた事がもっと深まったり、地域の再発見につながります。また、新たな地域づくりのアイデアが出てきたりします。そのように住民に教わり、共に学びあい（共有）、調査の計画から整理まで研究作業をいっしょに進めていく事、そして研究調査の成果を共有しあう事が里地里山のフィールドワークでは重要です。ワークショップはあらゆる場面や段階で設定して行うこと事をおすすめします。



ワークショップの風景

地図を囲んで地域のことを話し合う。実際に調べたものを元に世代を超えて話題を持つことができる。

ワークショップの風景

調べたことを元に住民とともに発表会



5、調査の整理方法

調べたことを整理する方法は、対象によって異なりますが、ある程度自分が直感的に理解できるやり方が望ましいと言えます。またその地域独特の認識による分類方法があるので、そういったことも勘案に入れて整理していきましょう。とにかく過度に複雑に分類してもあとでなかなか活用できないということがあります。

必要に応じて、すぐに活用できて、さらに状況によって変幻自在に組み合わせて使用できるような、単純で分かりやすい整理方法を心がけましょう。

□ 視覚化

調べた事を視覚化することは大変重要。手早く使えるのは次のもの。

- ・ 地図（絵地図等も含む）
- ・ 写真（活動写真等も含む）
- ・ イラスト（必ずしもうまく書く必要はない）

□ 耳で聞いて分かる言葉で

まとめ方も地元の住民も理解できるように「耳で聞いてわかる」書き方が重要です。特に里地里山地域の場合、プレゼンテーションは学校等の教育や研究の関係者だけではなく地元の住民も聞きにきます。そして調査の成果が地域と共有でき、地域づくりにもつながるものが求められます。

文章でないと分からない難しい言葉や専門用語で武装して「何となく分かった」というような書き方や整理の仕方では、いざ発表や成果報告をする際に役に立ちません。地元の語り口調を生かした整理を心がけましょう。もちろん学術研究用語や専門用語を注として加えて説明しておくことで理解や整理がよりうまくできるのであればそれは付け加えて可です。

□ 構造化

まとめたそれぞれの情報は、相互の情報のつながりや構造が見える形での整理しておくことが便利です。写真やまとめたメモ、地図等はつながりやカテゴリーごとにファイル（紙でもデータでもよい）して整理しておきましょう。

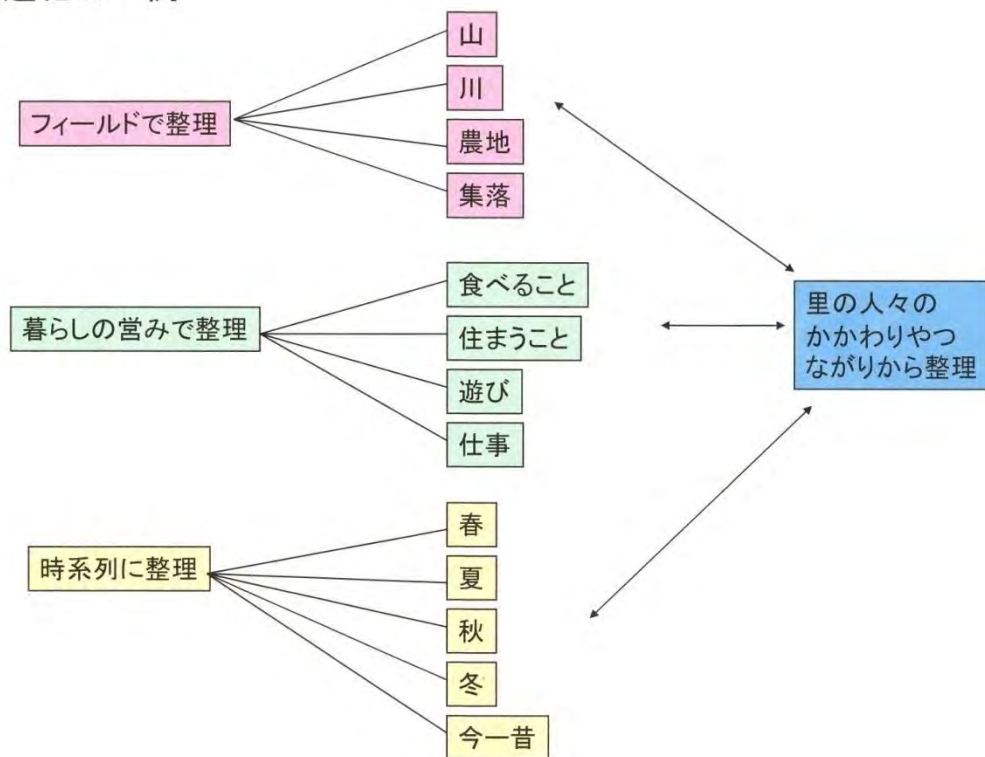
以上のことは、記憶が薄れる前に調査後速やかにしておく事がポイントです。

視覚化

利用できるものを最大限駆使してよく見える形でわかりやすく整理しよう。
右写真は調べたことを地形図にまとめているところ。



構造化の一例



構造化

上の図はあくまでも一例です。地元の人々の認識スタイルや取り組もうとしている里地里山の活動分野によって異なる整理方法が有効である場合に留意しましょう。

6、成果物の還元と地域づくりへの貢献

たいていの場合、前節のように調べたものを地域の人たちと共に分かりやすく整理した時点で、里地里山のフィールドワークの大部分は終了したと言えます。そこから地域の実像やどのような地域づくり計画が考えられるかが浮き彫りになってくるからです。後はそれを地域の人たちとワークショップやプレゼンテーションを通して共有していくだけです。心がけるのはとにかく地域の人々の声を反映して分かりやすい言葉遣いと論理で説明すること。ここで安易に横文字を使用することはおすすめできません。

□ 調査から地域づくりへ向かう3段階

調べた素材から地域づくりのための発想、計画、行動が開始されます。地域計画作りから実践へ向かうための各段階の基本的な姿勢は次の3点に集約されます

ステップ1 発想：自由に

ステップ2 計画：慎重に

ステップ3 行動：大胆に (参考 「地元学ネットワーク」主宰 吉本哲郎氏談)

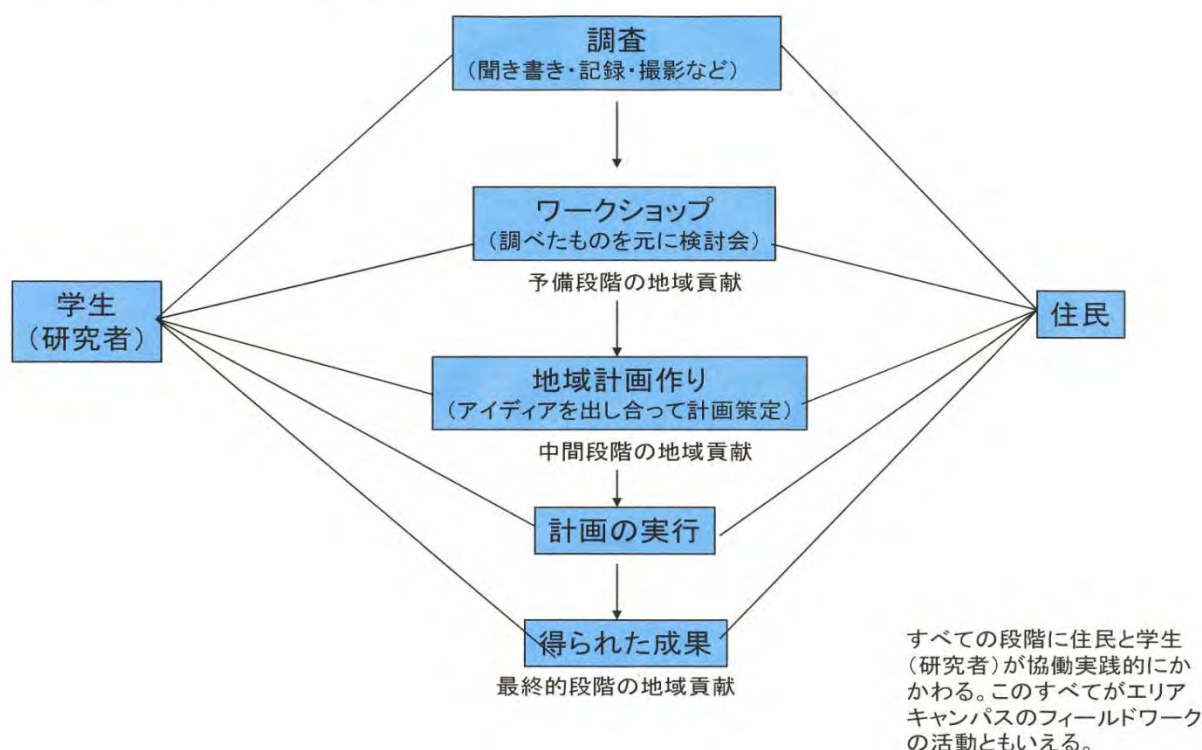
□ 行動後の成果は迅速に

調べっぱなしでは、地域からも不満も出てきます。それは従来の一方的な調査研究のあり方と同じからです。だから調べた後はなるべく早い段階で結果報告を行い、ここで地域づくりの計画ができたなら、即行動、そして実践後はなるべく早い段階でどんなに小さくてもよいから成果をあげて、住民に見せること。その事によって、地域住民のモチベーションがぐっと高まる。

□ 調査研究後の付き合いこそが大切

里地里山の学習のためのフィールドワークはあくまでも地域づくりのきっかけに過ぎない。大切なのはその後、継続して長く地域とつきあっていけるかということです。また調べたこと、そこで活動した事が、本当に地域の方々と共有され、地域づくりの展開によりよい影響を与えているかどうかということでしょう。

そのためにも、里地里山のフィールドワークをきっかけにしてその後も長く地域にかかわりながら、より高度な研究調査（地域の人々と共有できる点で）や地域づくりの実践にかかわりたいものです。そこからきっと新しい日本の原風景とも言えるすばらしい地域社会が生み出されることでしょう。



おわりに

里地里山における学習活動は大変先進的で刺激的な教育実践だと言われます。それは、従来の研究教育の枠を大きく超えて、地域と共に新たな暮らしのあり方を模索する姿勢にあるように思えます。このことは、里の人々と外部者が共に新たな日本のふるさとを作っていくことを考えたとき、大きな可能性を感じさせるものと言えます。

なぜなら、単なる趣味の学習活動のように、里地里山での学びは特定の学問分野の垣根に安住するのを許さないし、部内者のみでの評価に安住することも許さない性質のものであります。本当に地域社会に対してその地域の発展や期待に効果をもたらしているかどうか問われるものと言えるでしょう。

本稿で基本的に主張したのはとにかく地元の人々から「よく聞くこと」です。専門的な研究や教育はそのレベルがあがれば上がるほど、他人の事を聞かなくなるといった傾向があるようです。人は学問が進むと分かったつもりになってしまう。そして逆に他人を指導しよとし、教えようとする。だが、それでは本当の里地里山の実相やこれからの地域づくりにつながる実のある研究教育はできません。現地の人々の声に謙虚に耳を傾け、それを現地の人にも分かるような形で表現をしていくこと。この愚直な活動の積み重ねが、大きな地域貢献と研究教育の成果を生むだろうと考えるからです。

里地里山における学習や体験活動が現実の地域社会づくりで大きな貢献の芽となることを祈りつつ、今後の展開に期待をしたい。

◎角川里の自然環境学校について

地域子ども達への環境教育活動を行っていた市民団体「南部里地探検隊」を前身にする。2003年8月、組織体制を整え「角川里の自然環境学校」として設立された。農山村の自然や文化を次世代へ伝えとともに、本当に豊かに生きるための智恵や技術を教えつつ、子ども達と一緒に新しい「ふるさと」づくりを進めている。山、川、食、農、ものづくり、民話など多彩なプログラムを実施しており、里の住民による地域運営学校として、教育委員会などのサポートを受けながら行政と一体となって、継続的な自然体験学習活動を展開している。「実際に生活し子ども達と共に活動する里地里山博物館」(守山弘東京農業大学客員教授)など内外から高い評価を受けている。

2004年「里地里山活動30」(読売新聞主催・環境省共催)選定、2005年「田園自然再生コンクール」(農林水産省・環境省主催)入賞、同年「エコキッズやまがた大賞」(山形県環境アセスメント協会)受賞。2006年6月山形県環境学習支援団体認定。2007年2月食育活動東北農政局長賞受賞、4月「みどりの日」環境活動功労者環境大臣表彰。また「森、里、川、海とつながる自然再生」(中央法規出版2005年)に全国の自然再生13事例の1つとして取り上げられている。

◎NPO法人里の自然文化共育研究所について

角川里の自然環境学校を母体に07年研究教育調査部門として独立。10月には「エコ杯やまがた」入賞。同年山形ふるさと塾賛同団体となる。07年11月NPO法人となる。角川里の自然環境学校と連携しつつ、地域を越えた幅広い活動を展開させている。

発行	2008年3月 角川里の自然環境学校 NPO法人 里の自然文化共育研究所
住所	山形県最上郡戸沢村大字角川481-1 戸沢村農村環境改善センター1階 (2階 研究所)
電話・ファックス	0233-73-8051 (学校) 0233-73-8055 (研究所)
メール	sato-school@orion.ocn.ne.jp
ウェブ	http://www3.ocn.ne.jp/~satoweb/